



© Yuki Nakase

WOW! World of WearableArt at Bishop Museum

## 信じられない異国の話

年末に10日間ほど日本へ帰省しました。訪れるたび、変化し続ける日本の街と生活環境に驚かされます。東京と京都に滞在しましたが、「ニューヨークにしかないだろう」と信じて買って来たお土産物のほとんどは、全く同じとは言えずとも、似たようなものをどちらの街でも見つけることができ、日本で絶対に手に入らないものをニューヨークで探しだし贈られる人を驚かせようと企むことは、もはや不可能かもしれません。それよりも、今回は東京と京都にあってニューヨークにないもののほうが目につきました。

その一つは、ドラム式洗濯乾燥機です。洗濯物の計量に始まり洗剤の量を知らせてくれて、洗濯から乾燥までボタン1つでふっくらと仕上げしてくれる洗濯乾燥機の存在を、ニューヨークに戻ってからアメリカ人、ドイツ人とオーストラリア人の友人に話しましたが、信じてもらえませんでした。そもそも、ニューヨークにある賃貸アパートの部屋には洗濯機置き場というものはなく、小さな洗濯機を自身で持ち込んで部屋の洗い場に繋ぎ込む例とプロの洗濯屋に任せる例を除いて、ほとんどのアパート住民はビル内の共同コインランドリーか、もしくは街のコインランドリーを使用します。洗濯機と乾燥機は別の機械であり、洗濯機には水の温度と洗濯物の量、また「ふつう」と「デリケート」を選択できるボタンがあります。全自動ですが、洗剤の量を教えてくれる機能はなく、また選択した設定と実際の洗濯物の量と質が違っていようが構いなしです。休みの日は洗濯に半日費やすことが日常で、照明仲間の間では「昨日やっと洗濯できた」は「やっと休みがとれた」の同義語のように使っています。

また、日本の家の中は明るい!各部屋の天井に照明器材が設置されていて、しかもそれは蛍光灯のように部屋全体にむらなく拡散する光源であることが多く、暗くなくても家事や作業が捗ります。ニューヨークの平均的なアパート内の照明設定は、洋風ホテル客室内のそれと近い気がします。アパートを受け渡された時点で、バスルーム以外に照明器材が設置されていないことは珍しくなく、室内の照明設定は使い手の自由という楽しさがあります。天井に照明器材がないか、天井に電源があっても器材を設置しない、また器材があっても点灯しない家庭が多く、もっぱらスタンドライト等目線以下の高さの光源が中心です。それらが目線に入ってもまぶしくない程度まで明るさも控えるので、必然的に照度を抑えた環境が仕上がり、ダイナーテーブル等の上に並べた蝋燭の明かりが一層映えます。一般家庭での白色蛍光灯の使用頻度が非常に低いのもニューヨークの特徴であり、ナトリウム灯の街灯と相まってニューヨークの夜景は東京に比べると随分暖かい色温度です。

極めつけは、日本の便器でしょう。シャワーとドライ付きは今や当たり前、近くを通っただけで蓋が自動で開き、中では白色LEDが点灯し、使用前にさっと水が流れて洗浄してくれる日本の便器は、ニューヨーカーにとってまさに「アンビリーバブル」です。「そのLEDの色は変えられるのか?季節や気分、使用者によって色の変化をプログラムできるのか?」と質問するアメリカ人の照明仲間を前に、私は日本もアメリカもどちらも好きだと自覚しました。